徒然草

兼好

作者

兼好

神祇官の家柄である卜部氏の吉田流と言われる家系の出身で、古くから祭祀を職としていたが、祖父兼名の代に庶流となり、太政官としても出仕するようになっていた。なお、卜部家が吉田と称するようになったのは室町時代以降であり、江戸時代に捏造された「吉田兼好」という名は学問的に否定される。また、近年はその系図自体も否定する説が有力である。兼好の生没年については、「法金剛院過去帳」（「大日本史料」所収「諸寺過去帳」中）に「兼好法師　観応元年四月八日」とある記事その他によって、弘安六（一二八三）年生まれ、観応元（正平五）（一三五〇）年没とする説が行われてきたが、近年幾つかの資料が発見され、少なくとも、文和元（正平七）（一三五二）年までの生存が認められている。

▼略歴・業績

兼好は、後宇多天皇の妃で後二条天皇の生母である源基子（西華門院）の父、堀川大納言具守の家司であった。その縁で、後二条天皇のとき六位の蔵人となった。十九歳の頃とされる。そして、二十五歳の頃、従五位下左兵衛佐に任じたと推定されているが、政変によりその道は難しくなった。兼好の出家の時期は「大徳寺文書」（「大日本古文書」所収）によって三十歳代の初めであろうとされる。出家の動機については、主君の死などの出来事によるのではなく、「もっと私的で内発的な原因に導かれたもの」（「家司兼好の社会圏」）という風巻景次郎の推定がほぼ認められている。家集によって、出家前と出家後とに関東方面に下向していることが知られる。また、居所については、出家後に比叡山横川やその西方の修学院に住んだことが分かるが、出家後の本居については、山科小野庄とも、東山周辺であろうとも言われる。晩年は、洛西の仁和寺に近い双ケ岡に住んだようである。

兼好は歌人として名高く、頓阿・慶運・浄弁と並んで二条為世門下の四天王と称された。勅撰集には「続千載和歌集」（元応二（一三二〇）年、三十八歳頃）に一首採られたのをはじめ十六首が入集している。家集としては「兼好法師集」が残されている。「徒然草」の内容からもうかがわれるように、博学多識で、神道の他、仏教・儒教・老荘の学に知識と理解があり、和漢の文学や、特に有職故実の方面に豊かな知識を有していた。歌人としてはもとより能書家としても知られ、今日の言葉で言えば知識人・文化人として声望を博していたようである。このようにして出家後も俗世から離れることなく、その深い知識をもって貴族的なものから庶民に至るまで幅広く人間というものに関心を寄せたと言える。

兼好の生きた時代は、鎌倉幕府の威光が衰えていき、代わって足利尊氏が政権を取ろうという不安定な時代である。戦乱が打ち

続いたことが兼好出家の一因でもあろう。一方、兼好は平安王朝の文学隆盛の時代への憧れを強く持っていたとも言われる。戦乱を逃れ、山中で仏道修行に励みながら、平安王朝期への憧れを募らせる中で、兼好の美意識・価値観が育まれていったのである。そのような背景を頭に入れて、各教材を読み取りたい。

出典

▼底本

新編日本古典文学全集「方丈記　徒然草　正法眼蔵随聞記　歎異抄」（神田秀夫他校注、平成七〔一九九五〕年、小学館）によった。

同書は江戸初期の儒学者、三宅亡羊（寄斎）の書写したものを、烏丸光広が校訂した古活字本によっている。「徒然草」の伝本は数多く知られているが、この烏丸光広本の系統が流布本として近世以降の出版も非常に多い。昭和に入ってからの翻刻も多くこの本によっている。烏丸光広本の他には、正徹本系統、伝東常縁本系統、細川幽斎本系統などと分類される伝本があり、諸本の系統と、より原形に近い本文との問題が論じられている。「徒然草」の作者を兼好とするのは、年代明記の写本のうち最古のものである正徹自筆本（永享三〔一四三一〕年の奥書がある）によっており、定説となっている。

▼書名

正徹自筆本には「つれ〳〵種」とあるが、「徒然草」「つれ〳〵草」と書くのが普通である。全文を序段と第二百四十三段までとに分けるのは、江戸時代前期の歌学者北村季吟の「徒然草文段抄」に始まるが、古写本もほぼ同じような章段から成っている。もともとは独立の主題を持つ短文集として書かれたと考えられている。さらに、第百三十七段「花は盛りに」以下を下巻として上下二巻とすることも諸本ほぼ共通している。

▼成立

従来、橘純一が、作中の人名・官名・年号などを手がかりに、元徳二（一三三〇）年末から翌元徳三（元弘元）（一三三一）年秋にかけての約一か年間とした推定（「正註つれづれ草通釈」昭和十六、解説ほか）が定説として認められてきた。しかし、その後、諸本研究や内容の検討が進むに伴って、この橘説を超える幾つかの説が出されている。その中で、元応元（一三一九）年に第三十二段までが書かれ、元徳二年から元徳三年（元弘元年）にかけてそれ以下のほとんどが執筆されて、後にそれらがまとめられたときにいくらかの加筆補訂がなされたのであろうとする、安良岡康作説（「徒然草全注釈」昭和四十二・四十三、ほか）が説得力あるものとして注目されている。生没年に関する通説に従えば、「徒然草」の大部分の執筆は、兼好四十九歳頃のことである。

▼時代背景

兼好の四十歳代の社会情勢は、後醍醐天皇を中心にした大覚寺統と持明院統との対立が政治的危機として緊張の度を加え、ついに朝野における対立抗争の火ぶたが切って落とされるというものであった。さらに五十歳代は建武の中興から南北朝対立時代に至る動乱の時代であった。しかし三十歳代の早い頃に出家した兼好はこれらの争乱とかかわらず、世外の知識人として生きたようである。一種の自由人として激動の時代を生きた人の、社会と人間

とへの関心が生み出した文学が「徒然草」であると言えよう。

▼内容

多岐にわたっていて分類しにくいところもあるが、大別すると、「趣味的記事」「思想的論述」「説話的叙事」になる。「趣味的記事」は自然・人事に関する古典趣味の表現と言えるが、閑寂な景物、簡素な生活、繊細な人情を好んで描いており、無常観を柱とした中世的美意識に貫かれている。「思想的論述」には、儒仏の思想と道義観から老荘的な虚無思想までが見られるが、その根底には人生無常の冷徹な認識と求道の精神とが流れている。「説話的叙事」は、世間に伝えられている珍談奇談、芸能・武芸に関する逸話、特定の人の言行などで、そこには兼好の人間に対する好奇心と理解の深さが感じられる。これらの章段が、ある場合は自然な連想によってつながり、ある場合には新しい話題に転じていくというように、非連続の連続とか連歌的とか評される配列で並んでいる。文体も、この多様な内容に対応しており、「趣味的記事」では、主として流麗典雅な擬古的な和文であり、「思想的論述」では、雄健な和漢混交文で、「方丈記」「東関紀行（とうかんきこう）」の文体を推し進めた説得力ある論説文となっている。また、「説話的叙事」では、平明な文章が用いられている。「徒然草」は、「枕草子」「方丈記」と並び、三大随筆の一つとされ、思索的な古典作品の代表と言ってもよい。平安王朝への憧れを抱いていた作者は、平安時代の「枕草子」に強い影響を受けたようであるが、この「徒然草」自身もまた、後世に強い影響を与えたのである。

参考文献

❊教師用

▽注釈書

日本古典文学大系「方丈記・徒然草」西尾実　岩波書店　昭三十三
新日本古典文学大系「方丈記・徒然草」久保田淳　岩波書店　平元
日本古典文学全集「方丈記・徒然草他」永積安明　小学館　昭四十六
新潮日本古典集成「徒然草」木藤才蔵　新潮社　昭五十二
校注古典叢書「徒然草」市古貞次　明治書院　昭四十四
「徒然草全注釈」安良岡康作　角川書店　昭四十二・四十三
「徒然草全訳注」三木紀人　講談社　昭五十四～五十七
「増補徒然草解釈大成」三谷栄一他　有精堂　昭六十一

▽研究書

「徒然草総索引」時枝誠記　至文堂　昭三十
「枕草子・徒然草」（国語国文学研究史大成）斎藤清衛他　三省堂　昭三十五
「方丈記・徒然草」（日本文学研究資料叢書）有精堂　昭四十六
「徒然草研究序説」桑原博史　明治書院　昭五十一
「徒然草諸注集成」田辺爵　右文書院　昭五十四

▽入門書・鑑賞、その他

鑑賞日本古典文学「方丈記・徒然草」富倉徳次郎　角川書店　昭五十

研究資料日本古典文学「随筆文学」大曾根章介・久保田淳他
明治書院　昭五十八
新潮古典アルバム「方丈記・徒然草」稲田利徳　新潮社　平二
「徒然草講座」
有精堂　昭四十九〜五十二
「兼好の人と思想」中川徳之助　古川書房　昭五十
「古典鑑賞徒然草の世界」安良岡康作　教育出版　昭五十八
「卜部兼好」冨倉徳次郎　吉川弘文館　昭六十二
「カラー版徒然草」桑原博史　桜楓社　昭六十二
「徒然草必携」久保田淳　学燈社　昭六十二
「新版　徒然草」（角川ソフィア文庫）小川剛生　平成二十七
「兼好法師　徒然草に記されなかった真実」小川剛生
中央公論新社　平成二十九

❊**生徒用**

「徒然草」（角川ソフィア文庫　ビギナーズ・クラシックス）
角川学芸出版　平十四
「使える！『徒然草』」（ＰＨＰ新書）齋藤孝
ＰＨＰ研究所　平十七
「Essays in Idleness」ドナルド・キーン訳
チャールズ・イ・タトル出版　平成十八年
「図説「無常」の世を生きぬく古典の知恵！方丈記と徒然草」
三木紀人監修　青春出版社　平二十三
「絵本徒然草」（河出文庫）橋本治　河出書房新社　平十九
「徒然草をどう読むか」（放送大学叢書）島内裕子
左右社　平二十一

図版解説

〈奈良絵本『徒然草』〉

名古屋市蓬左文庫蔵。江戸時代前期（一七世紀）。絵本。六冊。「奈良絵」とよばれる極彩色の挿絵をともなう豪華な絵本で、婚礼調度として用いられる例が多かった。本書は、現存する奈良絵本の「徒然草」では、最も多くの挿絵を収録している。⇩P29・35・37

〈石山寺縁起〉

国立国会図書館蔵。石山寺建立の由来、本尊の観世音菩薩の霊験を描いた絵巻物。七巻。原本は鎌倉末期に絵師の高階隆兼（生没年未詳）が作ったと言われるが散佚し、後世補修したため巻により筆者が異なる。⇩P30

〈徒然草絵巻〉

サントリー美術館蔵。江戸時代前期（一七世紀）。二十巻。『徒然草』全文とそれに対応する二百四十八図の絵で構成される。海北友雪（一五九八〜一六七）筆。海北友松の長子。⇩P33

〈嵯峨本『徒然草』〉

国立国会図書館蔵。江戸時代初期。古活字版。嵯峨本とは、慶長十三年（一六〇八）から元和年間（一六一五〜二四）にかけ、角倉素庵と本阿弥光悦が印行した、木活字による書籍の総称。素庵が京都洛西嵯峨に住んだのでこの名がある。⇩P39